

アフガニスタンで起きて、(war)

——タリバン政権はどこへ向かうのか——

ジャーナリスト

高世 仁

●たかせ・ひとし、1953年山形県生まれ。日本電波ニュース社特派員として東南アジアに約10年駐在。1998～2020年、テレビ番組制作会社「ジン・ネット」代表。著書に「北朝鮮『対日潜入工作』」（共著、宝島社文庫）、「イスラム国とは何か」（共著、旬報社）など。

冷え込む経済と困窮

アフガニスタンでは一昨年、二〇二一年の八月、大きな政変が起きた。駐留米軍の撤退が進むなか、アメリカはじめ「国際社会」に支えられたガニ大統領の政権が崩壊、イスラム主義勢力タリバンが再び権力を握った。国外に逃れたいと、離陸する米軍輸送機に取りすがる人々の姿はまだ記憶に新しい。アフガニスタンは今どうなっているのか。昨年十一月、私は一九七四年からこの国を見続けてきたジャーナリスト、遠藤正雄さんとともに現地取材した。

首都カブールに入ったのは十一月中旬。標高一八〇



仕事を求める男たちが集まるカブールの寄せ場。政権に望むことは、まず「仕事をくれ」だ

〇メートルの高地にある街には冬の気配が濃く漂い、滞在中は気温が氷点下になる日もあった。

街に出ると遠藤さんが「政変直後よりは女性の姿が増えていきますね」という。当時は街頭に女性は少なくなり若い女性を見なかったという。街を制圧したタリバン兵を怖がって外出しなかったからだ。今はヒジャブ（スカーフ）をつけた若い女性たちが、連れだつて通りを歩く姿も見られる。

交差点やロータリーにはチェックポイント（検問所）があり、交通整理をする警察官とは別に、治安要員のタリバン兵が見張っている。だが検問はそっこのだけで、スマートフォン画面に見入っている兵士の姿に、治安の良さを感じた。遠藤さんによれば、米軍駐留時に

比べ、街の雰囲気ははるかに平穏だという。時おり、IS（イスラム国）による爆弾テロがあるが、全土で大きな戦闘は起きておらず、アフガニスタンには二十年前の平和が戻ってきた。

しかし、庶民の暮らしへと目を向けると、経済の冷え込みがもたらした窮状が見えてきた。

カブールの中心シャリナウ地区のロータリーには「寄せ場」がある。毎日ここに日雇い労働者が集まってくる。手配師が仕事をあっせんしてくれるのを待つ。この日はもう正午近くで陽が高いのに四十～五十人の男たちがたむろしていた。仕事にあぶれた人たちだ。タイルをカットするグラインダーやスコップなどを持っていて、建設現場で働く職人たちだとわかる。カメラを向けると、口々に仕事が激減したことへの不満を訴えてきた。

「朝六時からここに立っているんだが今日も仕事がない。仕事がある日は七〇〇アフガニ（約一五〇円）稼ぐが、今は月に数えるほどしか仕事もらえない。昼飯も食えないひどい暮らしだよ。前の政権のときはほとんど毎日仕事があったんだが」

タリバン政権に望むことはと聞くと、何人かがいつ